

# 動画のテキスト処理

安岡孝一\*

## はじめに

2008年春、引越作業中の京都大学人文科学研究所で、7 $\frac{1}{4}$ inch径ブリキ缶に入った16mmフィルム4巻が発見された。ほぼ1年に渡りリストアおよびデジタル化作業、さらに半年に渡る解読作業の結果、これら4巻のフィルムは、1934年と1936年に撮影されたものがそれぞれ1巻ずつ、1938年に撮影されたものが2巻で、撮影地はいずれも中国北部であることが判明した。すなわち、東方文化学院京都研究所および東方文化研究所が撮影したフィルムだったわけである<sup>†</sup>。

これらのフィルムのうち、筆者は、まず1938年撮影の2本を、デジタルアーカイブとして公開することを考えた。というのも、この2本は、東方文化研究所が1938年4月9日～6月15日に撮影した『雲岡石窟』調査記録映画の前巻・後巻であり、学術的な価値が非常に高いと考えられるからである。しかしながら、デジタルアーカイブとして公開すると言っても、合計35分の白黒サイレントMPEGをただノンベンダラリと見せるだけでは、あまりに芸がなさすぎるし、見る方も何が映っているのか全く理解できない。すなわち、デジタルアーカイブとしての公開に際し、この『雲岡石窟』という調査記録映画には何が映っているのかを、わかりやすく記述する必要性が生じた。端的に言えば、動画をテキストで記述しそれを処理する、ということ考察する必要性が生じたのである。

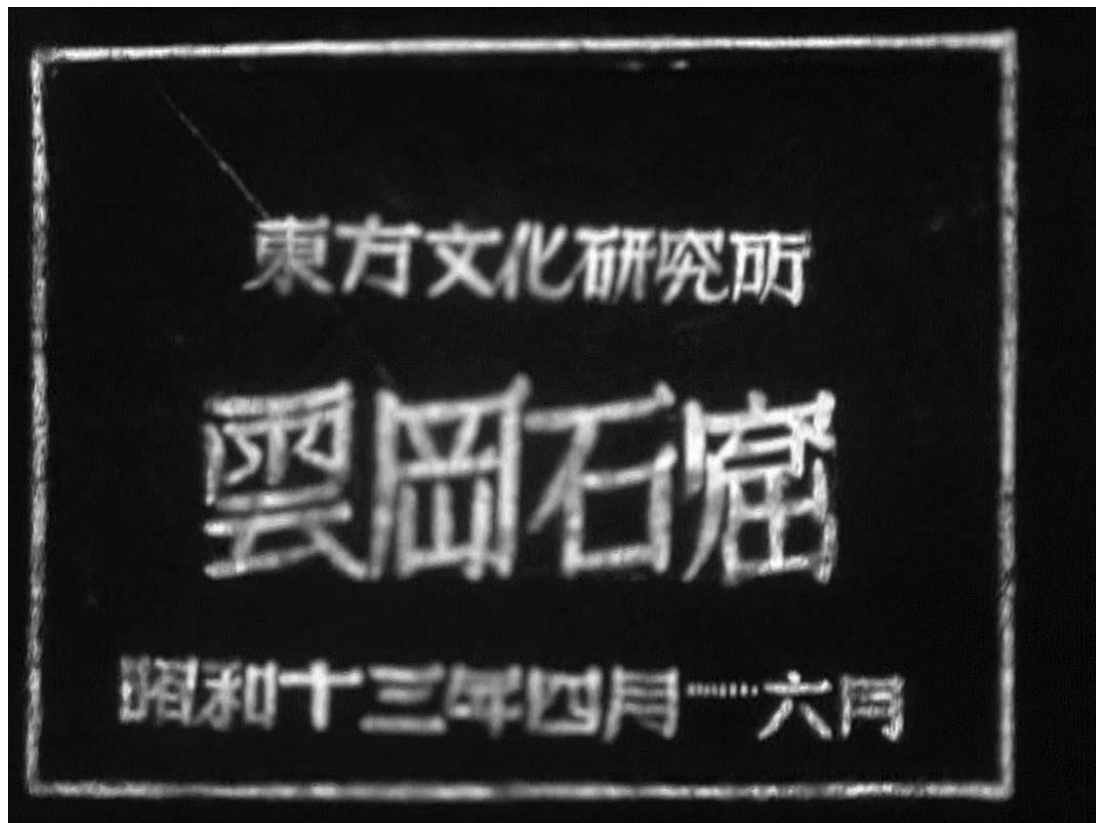
## 映画『雲岡石窟』の概要

1938年4月9日～6月19日撮影。白黒16mmサイレント35分。撮影者の水野清一は、東方文化研究所の嘱託員。撮影場所は、北京～張家口～天鎮～大同の鉄道風景、山西省大同の下華巖寺・上華巖寺・市街地・城壁南門・南善化寺、大同郊外の観音閣・雲岡寺など。そして、雲岡石窟およびその周辺の映像が、作品の後半を占める。挿入されている字幕は以下のとおり。

- 00:02 「東方文化研究所」「雲岡石窟」「昭和十三年四月—六月」
- 00:09 「一行」「水野清一」「羽館易」「小野勝年」「米田太三郎」「徐立信」
- 00:15 「撮影」「水野清一」
- 00:18 「四月九日—」「北京出発」「—正陽門車站」
- 01:27 「南口の谷」「—李花開く」
- 02:18 「朔北の曠野を行く」「—鶏鳴山—宣化—」
- 02:39 北京～青龍橋～張家口～天鎮～陽高～大同の鉄道略図
- 02:50 「四月十一日—」「カルガン」「即ち張家口」
- 03:25 「胸につけた良民票」「昨年之苦々しい戦闘の迹」「を偲ばしめる」「—天鎮」

\*京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター

<sup>†</sup>安岡孝一: 人文研所蔵16mmフィルムとそのデジタル化, 東洋学へのコンピュータ利用, 第21回研究セミナー (2010年3月), pp.3-8.



- 03:40 「車窓瞥見」
- 04:28 「晋北の高原に」「春は未だし」「雲の山—木の芽は堅い—毛皮」
- 05:03 「北京より 383 キロ」「大同車站に入る」
- 05:25 「我々は荷物と一緒に」「大同に到着した」
- 05:28 「晋北政府」「民生顧問 岩崎継生氏」「警務顧問 森一郎氏」「に迎へられて」
- 06:32 「四月十二日」「下華嚴寺」
- 07:01 「上華嚴寺」
- 08:54 「街頭所見」
- 12:04 「南門にて」「大同城内を望む」
- 12:53 「南寺こと」「南善化寺」
- 13:04 「雲岡途上の」「観音閣」
- 13:48 「雲岡」「石佛は保護されてゐる」「—雲岡鎮警備隊」
- 17:07 「我々の」「雲岡生活は始つた」「四月十三日から」「六月十六日に至る」
- 22:41 「雲岡の朝——」「臺上の衛兵」「—我々も護られてゐる」
- 23:40 「雲岡にも春が来て」「堆肥を運び—」「畑を鋤く」
- 24:40 「晋北の宝」「大同炭を運ぶ」「—原始的な運搬法で、宝は」「まだ死藏されてゐる」
- 25:26 「我々の 写真撮影」「屋根から—足場から」「羽箆易」「米田太三郎」
- 27:55 「雲岡参道の修理に」「工兵隊の活動」「—五月十五日」
- 28:19 「春深し!」「馬鈴薯を植ゑる」
- 30:05 「我々の」「拓本作業」「—拓工徐君」
- 30:17 「討伐隊は行く」「—四月二十五日」

31:50 「夏来る!」「緑陰に集る牧羊」「—第三・第四洞前」  
33:16 「我々の」「発掘作業は進む」「小野勝年」  
34:41 「芍薬老了」「調査終了」「水野清一」「六月十五日」  
35:04 「完了」

## サイレント映画のスク립ティング

映画を書写言語の形で記述したものは、一般には「完成台本」と呼ばれる。言い換えると「完成台本」は、映画をテキストとして記述したものの総称だと考えられる。

本来「完成台本」は、スク립ターなど映画制作者側の視点<sup>‡</sup>での記述がおこなわれる。しかし『雲岡石窟』には、そのような「完成台本」など存在していないので、それに向けたスク립ティングをおこなうしかない。ためしに『雲岡石窟』の冒頭2分間をスク립ティングしてみよう。

字幕「東方文化研究所」「雲岡石窟」「昭和十三年四月—六月」

字幕「一行」「水野清一」「羽館易」「小野勝年」「米田太三郎」「徐立信」

字幕「撮影」「水野清一」

字幕「四月九日—」「北京出発」「——正陽門車站」

外套を着た3人の男。足元にある多数の鞆を見下ろしている。

箭楼の下、街路に行きかう人々と人力車。

子供連れの女たち。

人力車の周りの男たち。人力車に乗りこむ男。

駅舎に次々と到着する人力車。駅舎の時計塔。

プラットホームで列車を待つ男。奥の線路に貨物車両。遠くに箭楼。

字幕「南口の谷」「—李花開く」

鉄道の車窓風景。谷。

鉄道の車窓風景。谷。

鉄道の車窓風景。万里の長城。

もちろん、筆者は『雲岡石窟』の制作には全く関わっていないので、この記述が映画制作者側の意図に沿ったものかどうかはわからない。ただ、この程度のスク립トであっても、各カットがどのようなものを映しているかに関して、検索のための手掛かりにはなるように思える。

## カットとシーンとシーケンス

映像は、一連のカットを集めた「シーン」と、さらに一連のシーンを集めた「シーケンス」によって、説明されることが多い。通常「完成台本」では、1カットを1行(あるいは1段落)で記述することになっており、さらに各シーンの切れ目に簡単な表題を記すことが多い。ここではあえて、XML風の構造化記述に挑戦してみよう。

<sup>‡</sup>坂本希代子: スクリプターという仕事, 映像テレビ技術, No.675 (2008年11月), pp.37-39.

```

<sequence><scene>
<shot>字幕「東方文化研究所」「雲岡石窟」「昭和十三年四月—六月」</shot>
<shot>字幕「一行」「水野清一」「羽館易」「小野勝年」「米田太三郎」「徐立信」
</shot>
<shot>字幕「撮影」「水野清一」</shot>
</scene></sequence>
<sequence><scene>
<shot>字幕「四月九日—」「北京出発」「—正陽門車站」</shot>
</scene>
<scene>
<shot>外套を着た3人の男。足元にある多数の鞆を見下ろしている。</shot>
</scene>
<scene>
<shot>箭楼の下、街路に行きかう人々と人力車。</shot>
<shot>子供連れの女たち。</shot>
<shot>人力車の周りの男たち。人力車に乗りこむ男。</shot>
<shot>駅舎に次々と到着する人力車。駅舎の時計塔。</shot>
</scene>
<scene>
<shot>プラットホームで列車を待つ男。奥の線路に貨物車両。遠くに箭楼。</shot>
</scene></sequence>
<sequence><scene>
<shot>字幕「南口の谷」「—李花開く」</shot>
</scene>
<scene>
<shot>鉄道の車窓風景。谷。</shot>
<shot>鉄道の車窓風景。谷。</shot>
<shot>鉄道の車窓風景。万里の長城。</shot>

```

さらに<shot>タグで囲まれる部分を、それぞれ HyTime か何かで MPEG の各カットとリンク付けすれば、とりあえず、動画のテキスト処理は可能となるように思える。しかし、それは本当に、動画のテキスト処理として十分なのだろうか？

## 本稿の記述法の問題点

前節で示した記述法の最大の問題点は、各カットに現れるモノがそれぞれ同一のモノなのかどうなのか、その記述が全くおこなわれていないところにある。たとえば、上記の構造化記述の「正陽門車站」のシーケンス中、「男」という記述が出てくるカットは3つある。

```

<shot>外套を着た3人の男。足元にある多数の鞆を見下ろしている。</shot>
<shot>人力車の周りの男たち。人力車に乗りこむ男。</shot>
<shot>プラットホームで列車を待つ男。奥の線路に貨物車両。遠くに箭楼。</shot>

```

これら3つのカットに現れる「男」は、同じ人物なのか、そうでないのか。

映画の基本的な語法においては、同じシーンに現れる同じ人物は、通常は同じ服なり同じ顔なりをしていて、たとえカットが変わっても同じ人物として認識されるよう描かれる。人物以外のモノについても同様である。そもそも、各カットの順序は撮影順とは違うかもしれないし、あるいはスタントマンが演じていたりするかもしれないのだが、それでも、何らかの映像的な語法によって同じモノであると認識されるよう描かれる。その視点が、本稿で示した記述法からは、決定的に欠落している。言い換えるなら、動画における「連続性の表現」という観点<sup>§</sup>が、本稿の記述法には欠けているのだ。

この「連続性」という観点は、本稿の方法を、サイレントからトーキーに拡張する際にも、重要な要素となることが予想される。しかしながら、現時点の筆者は、「連続性」を記述する方法を見いだしていない。というか、そもそも記述可能なのかどうかすら、はっきりしていない。まったく心もとない話ではあるが、今後の研究に期待されたい。

---

<sup>§</sup>実は、この「正陽門車站」のシーケンスの連続性を支えているのは、筆者の私見では「正陽門」という字幕と「箭楼」だ。その意味では、「男」の存在は、本編全体としては重要であるものの、シーケンスとしては大した意味がなかったりする。